

22. これらのことばを、主はあの山で、火と雲と暗やみの中から、あなたがたの全集会に、大きな声で告げられた。このほかのことは言われなかった。主はそれを二枚の石の板に書いて、私に授けられた。
23. あなたがたが、暗黒の中からのその御声を聞き、またその山が火で燃えていたときに、あなたがた、すなわちあなたがたの部族のすべてのかしらたちと長老たちとは、私のもとに近寄って来た。
24. そして言った。「私たちの神、主は、今、ご自身の栄光と偉大さを私たちに示されました。私たちは火の中から御声を聞きました。きょう、私たちは、神が人に語られても、人が生きることができるのを見ました。
25. 今、私たちはなぜ死ななければならないのでしょうか。この大きい火が私たちをなめ尽くそうとしています。もし、この上なお私たちの神、主の声を聞くならば、私たちは死ななければなりません。
26. いったい肉を持つ者で、私たちのように、火の中から語られる生ける神の声を聞いて、なお生きている者がありましようか。
27. あなたが近づいて行き、私たちの神、主が仰せになることをみな聞き、私たちの神、主があなたにお告げになることをみな、私たちに告げてくださいますように。私たちは聞いて、行ないます。」
28. 主はあなたがたが私に話していたとき、あなたがたのことばの声を聞かれて、主は私に仰せられた。「わたしはこの民があなたに話していることばの声を聞いた。彼らの言ったことは、みな、もつともである。
29. どうか、彼らの心がこのようであって、いつまでも、わたしを恐れ、わたしのすべての命令を守るように。そうして、彼らも、その子孫も、永久にしあわせになるように。
30. さあ、彼らに、『あなたがたは、自分の天幕に帰りなさい。』と言え。
31. しかし、あなたは、わたしとともにここにとどまれ。わたしは、あなたが彼らに教えるすべての命令——おきてと定め——を、あなたに告げよう。彼らは、わたしが与えて所有させようとしているその地で、それを行なうのだ。」
32. あなたがたは、あなたがたの神、主が命じられたとおりに守り行ないなさい。右にも左にもそれではならない。
33. あなたがたの神、主が命じられたすべての道を歩まなければならない。あなたがたが生き、しあわせになり、あなたがたが所有する地で、長く生きるためである。

説教

前回は申命記第5章の前半、十戒の全体を概観しました。十戒は、神が人間に期待するみこころの全体です。神は人間を愛してこの世に造られました。その神の愛に応じて人間がどう生きればよいのか、それを極めて簡潔に要約したのが十戒です。その内容は、要するに神と人を愛するということでした。十戒の前半五つの戒めは神を愛する具体的な生き方であり、後半五つの戒めは人を愛する具体的な生き方です。神に特別に愛された神の民であるイスラエルは、神に造られたのみならず、エジプトで奴隷として苦しんでいたところを、神は救い出して出エジプトさせてくださいました。その神の愛に感謝し、神の愛に応じて、神と人を愛して生きる、それが十戒です。

神を知らず、神の愛を知らない者は、これとは全く正反対に生きます。すなわち、神ならぬものを神とし、神の御名をみだりに唱え、安息日を聖とせず、父と母を敬いません。そして、殺し、姦淫し、盗み、嘘をつき、人のものを欲しがります。しかし、神の愛を知り、神の愛に応じて生きようとする者は、神だけを神とし、神の御名をあがめ、安息日を聖とし、父と母を敬います。そして、殺さず、姦淫せず、盗まず、嘘をつかず、人のものを貪りません。そうして、神と人を愛して生きるよう努めるのです。

「この他のことは言われなかった」(22)とモーセが解説するように、十戒はこれだけで充分十全に神のみこころを言い表したもので、ここに神が人間に期待する一切が完璧に啓示されていたのでした。

続く申命記5章の後半は、モーセによる十戒の解説です。すなわち、十戒とは何であり、何のために神は人に十戒を与えたのか、それがモーセの口を通して説明されている貴重なテキストです。これによると、まず十戒がどのような状況で神から与えられたかが説明されます。

出エジプト記19章にその時の状況が生々しく記されていますが、申命記5章22節では簡潔にこう記します。「これらのことばを、主はあの山で、火と雲と暗やみの中から、あなたがたの全集会に、大きな声で告げられた。このほかのことは言われなかった。主はそれを二枚の石の板に書いて、私に授けられた。」イスラエルは、エジプトを脱出した後、荒野を経てシナイ山に辿り着き、そこで十戒を教えられます。その十戒は「二枚の石の板」に記されてモーセに「授けられ」ました。その際、シナイ山は、朝から山頂を「雷と稲妻と密雲」が覆い、「全山が煙り」「激しく震え」る中で、神が「山の上に降りてこられた」ので、そこにいた「民はみな震え上がった」のでした(出エジプト19:16-18)。

「雲と暗闇」というのは、神の臨在の象徴です。神は見えません。生きて神を見ることはできません。神は見えない所におられるのです。だから、それは空高く「雲」の彼方であり、同時に見ることのできない「暗闇」の中におられるとされました。そして、もう一つの神の臨在を象徴するものとして「火」と言われます。神は「雲と暗闇」と「火」の中から十戒を全会衆に「大きな声で告げられた」のでした。言うまでもないことですが、「火」は物を燃やします。神は燃える炎のようなお方で、と言うよりは、燃える炎そのものであられます。あらゆる不義を焼き尽くす火なのです。ゴミの焼却場のように、神に逆らう一切の不義を燃やしてすっかり綺麗に掃除をする「火」です。神が火の中から十戒を人々に教えたとは、その戒めの一つ一つがまさに「火」そのものであり、聞く者の内にある一切の不義を焼き尽くす「炎のことば」であることを意味します。

この時、シナイ山の麓で十戒を神から告げられた人々の反応が記録されていますが、やはりこの「火」という言葉が三度も立て続けに連呼されているのを見ると、よほど強烈な印象だったことがわかります。「私たちは火の中から御声を聞きました。」(申命記5:24)「今、私たちはなぜ死ななければならないのでしょうか。この大きい火が私たちをなめ尽くそうとしています。」(25)「いったい肉を持つ者で、私たちのように、火の中から語られる生ける神の声を聞いて、なお生きている者がありませんか。」(26)圧倒的に激しい神の炎で今にも焼き尽くされて死にそうだという当時の生々しい緊迫感が伝わってきます。今ちょうど、小笠原諸島で噴火が起きて、海面に陸地が生じ、そこからボコボコと真っ赤なマグマが吹き出す映像を見ましたが、神が火の中から語り、それを人々が聞くとはそのような様子だったのでしょくか。

でも、実際に目に見えてそんな状況であったことは確かに事実ですが、「火の中から語られる生ける神の声」と言われるように、神のことばの一つ一つ、すなわち十戒の戒め一つ一つが、それを聞く人々にとって一切をすっかり焼き尽くす「火」のように聞こえたとも理解できます。例えば、「あなたには、わたしの他に、他の神々があってはならない」という第一戒が、エジプトで偶像崇拜三昧であったイスラエルの民にとっては、まさしく「火」のことばとして恐ろしく迫ったでしょうし、「父と母を敬え」、「殺してはならない」、「姦淫してはならない」、「嘘をついてはならない」との神の戒めは、これに悉く逆らって生きてきた罪人イスラエルにとっては、聞いた直後、即座に神の審判を受けて殺されてしまうのではないかと直感するほど底知れぬ恐怖を味わったことと推測できます。だからこそ人々は、十戒を聞いた直後に殺されると思ったらそうではなく、死なずに生きていることに驚き、同時に感激し、感謝して、モーセを通して教えられる十戒に、「私たちは聞いて、行ないます」と従順に聞き従うことを告白したのでした(27)。

こうして、「火」の中から語られた「生ける神の声」である十戒は、イスラエルの人々を造り変えます。神と関係の無い人生を生きてきた彼らを、神に聞き従う者へと新しく造り変えるのです。「火」は聖なる神の臨在を表す最も象徴的なものですが、最初、このシナイ山で現れて、八十歳のモーセの人生を造り変えた神の火は、神に逆らう悪の大帝国エジプトを焼き払って、神に屈服させ、ここでは、イスラエルの民に十戒を教えて、彼らの人生を根

本から新しく造り変えようとしています。それは、死んだ者を生かす、神のいのちのことばです。神に全く応えることのない死んだ者に、いのちを吹き込んで、神に伝えて生きる者とする、まさに「生ける神の声」なのです。神は、生きて働いて、幸いを下し、災いを下して、神のわざを妨げるあらゆる不義を焼き尽くして罪人をきよめ、そうやってみこころを行わせるのです。

「私たちは聞いて、行ないます」と素直に従順を告白するイスラエルのことばを聞いて、神はモーセに言われます。「わたしはこの民があなたに話していることばの声を聞いた。彼らの言ったことは、みな、もつともである。どうか、彼らの心がこのようであって、いつまでも、わたしを恐れ、わたしのすべての命令を守るように。そうして、彼らも、その子孫も、永久にしあわせになるように。」(28-29)「私たちは聞いて、行ないます」という従順の告白について、神は「彼らの言ったことは、みな、もつともである」と評価します。「もつともである」の直訳は「良く振る舞う、正しく扱う、最高に扱う」で、神が啓示した十戒に従順を告白したことは正しい応答であったことがわかります。そして、初心を忘れず、生涯十戒を守り行うよう、こう続けます。「どうか、彼らの心がこのようであって、いつまでも、わたしを恐れ、わたしのすべての命令を守るように。」そうして、最後にこう締め括るのです。「そうして、彼らも、その子孫も、永久にしあわせになるように。」

ここに十戒の本質が言い表されています。これは、十戒についての神ご自身の解説になりますが、要するに、どうして神が人に十戒を与えたかと言えば「彼らも、その子孫も、永久にしあわせになるように」と言うのです。「しあわせになる」というヘブル語は、先の「もつともである」と同じ言葉の基本形で、「良い、正しい、理想的なこの上ない幸い」の意味です。「生ける神の声」である十戒に対して、良く応答すれば良く生きることができ、十戒を最高に扱えば最高に幸いな人生を生きることができる、ということになります。つまり、十戒に対する私たちの応答が、そのまま私たちの人生の幸いを決定するのです。そして、私たち自身の人生のみならず、私たちの子どもや孫といった「子孫」の幸せも、これにかかっています。すなわち、私たちと子孫の幸いは、ただひとえに十戒を忠実に守り行うか否かにかかっているのです。

これを受けて、モーセは十戒を守り行うことを重ねて強調します。「あなたがたは、あなたがたの神、主が命じられたとおりに守り行ないなさい。右にも左にもそれてはならない。あなたがたの神、主が命じられたすべての道を歩まなければならない。あなたがたが生き、しあわせになり、あなたがたが所有する地で、長く生きるためである。」(32-33)ここでの「しあわせになる」は、先の「しあわせになる」(29節)、「もつともである」(28節)と訳された動詞の名詞形で、「最高に理想的な幸い、これ以上ない最高に良い状態」を意味する言葉としてしばしば旧約聖書に登場します。十戒を守り行うならば、自分も子どもも、子々孫々、「最高に理想的に幸い」な、「これ以上ない最高に良い」人生を生きることができるのです。

神だけを神とし、神の御名をあがめ、安息日を聖とし、父と母を敬い、殺さず、姦淫せず、盗まず、嘘をつかず、人のものを欲しらずに、神が自分にくださったもので完全に満足し、感謝して生きる人生は、最高の人生です。天国です。反対に、十戒を守り行わない人生は、「不幸」です。神ならぬものを神とし、神の御名をみだりに唱え、安息日を聖とせず、父と母を敬わず、殺し、姦淫し、盗み、嘘をつき、人のものを羨んでばかりの人生は、地獄です。そういう家庭も地獄だし、そういう人生も地獄です。生き方が改まらなければ、子々孫々、三代四代と、いつまで経っても地獄です。

私たち罪人が死なずに、「生き」、さらには「しあわせになり」、そうして、「長く生きるため」の唯一の道は、「生ける神の声」である十戒にただ従順に「聞いて、従う」ことにあり、他にはどこを探してもありません。